
異世界の訪問者

パイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の訪問者

【Nコード】

N0573W

【作者名】

パイン

【あらすじ】

はるか昔、有力な魔法使いによって陰の幻獣界と陽の人間界に分けられた世界。世界を分ける時、幻獣の王である竜王は、恋人であった人間の統一王国の女王・聖王に「女王の身になにかあったら自分が、女王の子孫の身になにかあったら自分の子孫が界を超えて助けにくる」という誓約を残した。時は巡り、乱世の時代が四代目の竜王と誓約者の手で平和になり人間たちが、魔法を忘れ機械に頼る時代に本来の世界からある理由で追放された人間嫌いの白銀の竜（神）と四天王が、時空の逆流に巻き込まれ異世界にて人間と悪魔の

ハーフに会う事で運命の歯車がゆっくりと回り始める。

序章

何もない空間に白銀の竜は、己に着いて来た仲間たちと共に飛行していた。

「竜王様。何か疲れてませんか？エウレカも疲れたって言ってるのでそこら辺で休もうぜえ」

「……いつ私が、そんな事を言ったのかしら（怒）」

赤色の竜に水色の竜は、ムツとしながらもつまらなさそうに答えた。

「エドラス。俺の名前は、ファングだ。竜王ではない」

「でもりゅ…」

なおもいい募るエドラスに茶色の竜が、説教しているのにうんざりした顔で聞いていた。

「しつこいぞ、“深紅王^{しんくおう}エドラス”。貴様と私が、“四天王”とは、世も末だな」

「だって鋼嵐王^{どうらんおう}マゲラン。ファング様は、俺たちドラゴンを作った謂わば“神様”だぜえ？なあ、“水麗王^{すいれんおう}エウレカ”」

「私を貴方みたいな能天気と一緒にしないで」

三頭の喧嘩を背後からやってきた黒竜。“雷帝王^{らいていおう}アルフレット”は、素通りしファングの隣までやって来た。

「フアング、本当にあれと僕たちが四天王なの？」

「気持ちには、分かるが…何故幻獣やドラゴンたちが、お前たちのことを四天王と呼ぶか分かるか？」

「うう…う…綺麗だから！」

「……お前たちは、精霊魔法が、若いながらも究極レベルまで達しているだけでなく残りの2つも上級レベルまで極めているからだ」

「でも僕は、“風”でエウレカは“水”、マゲランが、“土”でエドラスが、“火”…でもフアングは、相性の関係で多くても3つしか精霊の加護が、ないのに四大原則全て使えるね！何で？」

「俺の場合は、ドラゴンだが、精霊に少し近かったからな、おそろくそれが、関係しているのだろう」

「ふうーん」

まだ納得しきれてない三頭の中でもまだ若いドラゴンにフアングは、優しい眼差しで見ていた。

「ずっとこんな日常が、続けば良いのに」と思っていた。

しかしフアングは、エドラスの言う通りここ最近見る夢、にしは、妙に現実帯びていてとても夢では、片付けられなかった。

夢の内容は、黒みかがった青で黒く細長い尻尾に体じゅうに青の炎

を纏いながら少しつり上がった瞳に嵌め込まれた蒼瞳に涙を流しながらただ「御免なさい」と言うだけで何もできない自身に苛立ちながらも彼の側にずっと居たいと初めて思った。

人間の身勝手さに愛想が、つき仲間と共に旅に出たのだが、何故かあの少年を守ってあげたいと思った。

駄目ならかつて初代竜王が人間とやった誓約をしてでも側にありたいと願った。

旅をしながら少年を探すか、長々見つかず諦めていた時に事件が起こった。

「ファング様危ない！」

エウレカのせっぽうつまった言葉にファングは、はっ、と意識か、戻り体勢を立て直すも空間により逆流に巻き込まれてしまった。

「ファング様！！」

四天王もファングの後に続き躊躇いなく逆流に突っ込み消えてしまった。

第一章 竜王と悪魔

聖十字学園理事長にして聖十字騎士団の名誉騎士を努める悪魔。メフィスト・フェレスは、理事長室にまだ残っている書類を投げ捨て先ほど愚弟のアマイモンに物質界には、決して存在しない遺跡を見つけたと言う知らせを受け現場に向かった。

現場についたメフィストは、遺跡にしては、保存状態が、良いのに感心した。

「ほお…これは、見事な遺跡ですね」

「はい、この遺跡からは、物質界でも虚無界にも存在しない物だと分かりました」

「ふむう、“地の王”であるお前が、言うのだから間違いないな」

メフィストが、うんうんと頷いている様子をアマイモンは、可愛いらしい顔立ちをしているが、人形の様な顔でじっと見ていた。

「ところで兄上」

「…何です」

「早く遺跡に入りましょう？僕、奥村燐に会いたいです」

一見人形の様に変化が、ない様に見えるアマイモンだが、メフィストの目には、目をキラキラさせながら“遊びたい！”と、言ってるようにしか見えなかった。

「……はあ、許可しよ。」

「わあい」

「ただし“遊ぶ”な」

「……………はい」

「……………」

メフィストは、アマイモンの言葉に間が合ったが、無視しきつさと遺跡に入るメフィストの後を続けてアマイモンは、追った。

※※※

しかし二人が、遺跡に入るとたん物質界は勿論虚無界にもいない人の姿をしているが、全体に豚のイメージな生き物が、ぐるりと二人を囲んだ。

「兄上。何ですか、これ」

アマイモンが、これと指した豚擬きにメフィストは、僅かばかり弾んだ声音で説明をした。

「私も良く分かりません。ですが、私の記憶に間違いが、なければこれらは“悪魔”ではなく俗に言う“オーク”。つまり“魔物”

です」

「魔物？確か兄上が、貸してくれたゲームにそんなのが、いましたね」

「そうと決まればやる事は、一つです！」

メフィストが、ドイツ語でカウントをするとピンクの煙に周りのオークたちは、動揺しているが、現れた二人に感情が、あるか分からないオークたちは、固まってしまった。

「……兄上」

「何ですか？」

「この服は？」

「やはりまず形からですからね♪」

二人の格好は、かのド●ク●をおもわせる服装に変わっていた。アマイモンは格闘家の服にメフィストは、白いフードを着ていた。

「アマイモンは武道家で私は、白魔導師…ピッタリな配役では、ないですか！」

「……………」

メフィストの言葉にアマイモンは、白魔導師じゃなく遊び人では…と思ったが、話しが、ややこしくなる気がしてとりあえずオークを倒すことに専念することにした。

「じゃ殺していいのですか？」

「許可する」

メフィストの言葉にさっきまでぼおとしていた表情から一転、まるで待てを解かれた犬の様な嬉々とした表情で一方的な虐殺が成されていた。

※※※

数分しかたってないのにアマイモン一人だけで50体はいたオークを、全て虐殺してしまった。

「遊ぶ過ぎだ。一分で片付けろ」

「はい、すみませんでした」

メフィストの叱責にアマイモンが、小さく謝罪しるのを見もせず奥に行くメフィストの後を追った。

二人は、時々襲って来る魔物を倒しながらさらに奥へと向かった。

※※※

「ほお、これは凄いですね」

最下層まで来た二人は、中央に複雑な模様が、書かれた魔法円に向かった。

しかしメフィストが四歩歩いた所で細長い何かが、横切り交わしたと同時に現れた生物を見た。

顔が蜥蜴で体が、蛇の様な姿をしその口から時より吐かれる息は紫色をしていた。

「ほお、今度は、アームですか」

面白そうにワームを見ていたメフィストだが、アマイモンが、ワームを面白い玩具を見る目で見ている事に気づいたメフィストが、話しかけた。

「どうしたアマイモン」

「兄上。僕、あれが、欲しいです」

アマイモンのおねだりにこの魔法円以外興味がないメフィストの好きにしろと言う言葉にアマイモンは…。

「はい、ありがとうございます。兄上」

メフィストは、アマイモンにもワームにも興味が、ないため見たことない魔法円を楽しそうに調べ初めたのを確認し未だ威嚇しているワームを眺めた。

「君、僕のペットになりますか？ヘビモスには、劣りますけどそのデザインが、気に入りました」

言うやいならアマイモンは、ワームに躍りかかりワームも毒のブレスを吐きながら応戦する傍らメフィストは、魔法円の分析をしていた。一言「静かに」と言って。

※※※

またしても圧倒的な力でワームを自分のペットにしてご満悦のアマイモンにメフィストは、眉間に皺を寄せた。

「静かにしろとあれほど言ったでしょ？」

「すみません。気をつけます」

「まあいい…だが、次に私の言いつけを守らなければ殺すぞ？」

「はい」

アマイモンの返事にも変えさないメフィストにアマイモンは、さっきから気になっていた魔法円について聞いた。

「兄上、この魔法円は、何ですか？僕には、召喚魔法にしか見えませんが？」

「その通りだ。しかもこの魔法円を書いた人物は、相当の術者だったらしいですしね」

メフィストが、さらに説明をしようとした時に魔法円が、いきなり

輝きだした事に二人とも僅かに驚くが、直ぐにいつでも反撃出来る体制で魔法円から現れる誰かを警戒した。

現れた影からして人では、あるが、その存在感に二人は、息を詰めた。

「（何て言う存在感だ、まるで父上と対人した時と同じプレッシャーですね）」

「（僕より…ううん、ひょっとしたら兄上より強いかな?）」

魔法円から現れた白い鎧を着た腰まである白銀の髪に赤い瞳をした超絶美青年は、メフィストたちを見ると「ここは、どこだ」と訪ねられた。

「物質界ですよ」

「物質界？陰界のことか？」

「まあ虚無界と物質界は、表裏一体。陰陽に例えてもおかしくないですが…」

そう言うとメフィストは、チラリと白銀の男を見た。

「貴方は、一体何ものなんですか？まさか人間とは、言いませんよね?」

「俺の名前は、フアング。全ての竜たちを作った“神”だ」

二人は、男が、“神”と言うのを信じなかったが、アマイモンが、

ペットにしていたワームは、フアングを恐れ全に逃げ腰だった。

「ほお、ストーンワームか。まだ陰世に幻獣が、いたとは…確か四大目竜王により竜と一部の幻獣を残して陰世と切り離れたと聞いたが」

しみじみと懐かしそうに言われてもメフィストは、見た目が、人間でも相手は、竜だ。油断できない。

「兄上。こいつと遊んで良いですか？」

「駄目だ。私たちの目的は、遺跡の謎だ。ある程度解ったからここに用は、ありません。」

「でも兄上…」

珍しく渋るアマイモンにため息をつきとっておきの切り札を使った。

「奥村くんに会うのでしょ？」

「はい、帰りましょう」

手のひらを返しさっきまで駄々を捏ねていたのが、嘘の様にさつさとストーンワームに乗って遺跡から出ていく姿に「相変わらず使いやすいな」とこぼしメフィストは、ちらりと男が、いた場所に視線をやったが、すでに居なくなっていた。

「まあ、良いでしょ。何をしでかしても私には、関係ないですが…我らの末の弟に手を出してみなさい……容赦しません」

メフィストらは、既に居ない男に聞こえるはずもないのに忠告するとピンクの煙と共に消えてしまった。

遺跡の方も何事も無かったの様に消えてしまった。

――まるで最初からそこに無かったかの様に。

一話 竜王召喚

聖十字町にある名門。聖十字学園には、2つの顔が、あった。

一つ目は、金持ちや一般人が、通う学舎。

一つは：人間に害を及ぼす悪魔を倒すために作られた裏の顔。祓魔塾。

その教室に数人の祓魔師の卵たちは、二日目の授業を召喚のテストをしていた。

見本を見せたネイガウスに続いて神木出雲は、略式の紙に自身の血を垂らし祝詞を唱え白虎^{びつやこ}2体に杜山しえみは、緑男^{グリーンマン}の幼性を召喚した。

しかし京都組と朴朔子もやってみたが、変化はなかった。

「今年は手騎士^{テイマー}候補が、豊作のようだな」

「ねえねえ燐！燐は、召喚できた？」

出雲に誉められ？嬉しさのあまりネイガウスの説明を遮り笑顔で言うしえみに燐は、真っ赤になりながら首を横にふった。

「はは、俺も勝麿たちと同じで才能ないみたいだ」

「そっか、残念だね」

しえみの言葉に燐は、苦笑いで答えた。

実は、今日メフィストに呼び出されて今日の魔法円・印章術の授業でけて血を垂らすなど注意されたからだ。

理由は、「あなたは、サタンの息子：例え否定してもそれは、事実です。ですからその血に惹かれる悪魔たちが、あなたの正体を言う

かもしれませんが絶対にならないように」と。

しかしそんな燐の努力も出雲の一言で呆気なく崩れた。

「ふん、所詮あんたの力なんてその程度ね。才能がない奴はかわいそう」

「い、出雲ちゃん！」

出雲の挑発に大親友の朴は、宥めたが、短気な性格の燐が、反論した。

「うるせえ！俺だってな。やれば出来るんだよ！！」

「じゃやって見てよ、今直ぐ」

「言い過ぎだよ出雲ちゃん！」

しかし戸惑う燐に出雲は、止めをさした。

「ふん、意気地無し」

ぶちい。

等々燐の堪忍袋の緒が切れてしまった。

「ああやってやるさ！そこで鼻くそかっぽじって良く見てろよ！！」

いや、鼻くそじゃなくて目じゃ…と誰もが、思ったが、勿論皆の心の声が、聞こえるはずもなく呪文を唱えるが、頭の作りが、残念な燐だ。まともな呪文も言えるはずもなく……。

「え、えーと…すき焼き好き…じゃなくて…眼鏡巨乳…て、ちげえし…………ええい面倒くせえ！我の名は奥村燐。この血を持って現れたまえ！！」

前半はともかく後半の呪文らしい台詞に皆が、少し燐を見直すが、実のところ後半の呪文は、雪男の愛読書のキャラの台詞だったりする。

ぽんっ！

軽い音と共に煙が、舞いそこから現れた存在に皆が、咂然としてしまった。

無理もない…煙が、晴れそこに現れたのは、どこから見ても人間にしか見えない白銀の髪に赤色の瞳が、印象的な超絶美形が、居るからだ。

「やっと…やっと会えた」

「はあ？ええ？？」

いきなりの男の抱擁に燐は、何が何だか分からず混乱していると男は、燐の前に方膝をつき白い手の甲にキスをしよう言った。

「やっと会えた俺の愛しい人…誓約を申し込む」

「…………」

いきなり美形の男に王子の様な告白擬きをされフリーズした燐にゆっくりと近づく綺麗な顔に燐は、悲鳴をあげた。

「ぎゃああああ！男だあ！！？」

燐の拳が、男の顎に当たる前に距離をとると悲しげな顔で燐を見る男にうっと言葉に詰まった。

「そうか…俺にとっては久しぶりだが、お前にとっては、初めてだな。先程の無礼を許してくれ、俺の名前は、ファングだ」

「あ、ああ…奥村…：燐だ」

「燐か…いい名前だ」

「……っ！さ、サンキュー／／／／」

照れる燐を愛しげに見るファングに皆は、何か恋人同士に見えてうろたえるが、それに応じない人が、一人いた。

「貴様は、何者だ。見たところ悪魔ではないが？」

「悪魔？そう言えばあの男も同じ事を言ってたな」

「あの男？」

いぶかしげるネイガウスにファングは、燐を見ていた優しい顔ではなく何の感情を写さない冷たい目で彼らを見た。

「貴様…俺の見たところ死霊使いか？その召喚円の奴は死体ではないか…愚かな、神を恐れる職業だな」

「？貴様が、何を言っているか分からないが、こいつは対悪魔用兵器だ」

ネイガウスの言葉にファングは、眉間に皺を寄せた。

「：どっちでもいいが、俺の部下たちはどこだ？」

「部下？そんなもの知らんが：本当に貴様は、何者だ」

「全ての竜たちを作り陽界を作った神とも竜王とも呼ばれている」

ファングの言葉にネイガウスは、もう少し説明を求めようとしたが。

「はい、そこまでで〜す♪」

いつの間にか現れた胡散臭い笑顔の白い道化師くらうんの上級悪魔。メフィスト・フェレスは、燐を腕に抱いたまま教卓の上に座っていた。

「貴様は遺跡の：なぜここに」

ファングの言葉にメフィストは、「はぁ！」と鼻で笑った。

「愚問ですね！ここは私の結果が、張り巡らした学園、すなわち私の庭みたいな物ですよ？いて当然です」

「燐を寄せせ」

ファングの体から今までにない殺気にネイガウスを含め全ての生徒たちが、動けない中メフィストは、気を失っている燐を自分の自宅に魔法で送るといつも持っている傘をファングに向けて笑った。

「私の学園で不法侵入及び生徒誘拐を犯したんです…ただで返しませんよ？」

メフィストの今までにない本気に塾生たちは、固まっていたが、ネイガウスだけは、皆を非難させるため教室から逃げ二人つきりになった教室を一般人なら死んでしまう位の殺気を満たしていた。

「燐を出さないのなら…」

ファングは、背中に肩幅の広い血の様な真っ赤な剣を抜きメフィストに向けた。

「ならば死ね」

ファングは、メフィストに躍りかかった。

二話 青焔魔（サタン）の記憶。落胤の困惑（前書き）

アニメク22話のネタバレです。

私なりのやり方で所々アニメとは、違う部分があります。

アニメクの世界を壊されたくない方は物質界へ：それでも見たい人は、虚無世へどうぞ。

二話 青焰魔（サタン）の記憶。落胤の困惑

何だこれ…いい香りだな…それに柔らけえ。

あははは！くすぐってえよ。肉球に触るなよ……………ん？肉球？？

ばちい。

燐が、目を覚ますと顔に数個のホクロがありどこことなく自分に似た顔立ちの髪の長い女性が、俺の背を撫でていた。

「にゃあ！！（ぎゃああああ！！）」

燐が、慌てて逃げようとしたが、足に痛みを感じその場でうずくまった。

「あ、こら！足を怪我してるのに動いちゃ駄目よ」

女性は、そう言うのと燐を抱き上げ自分の膝の上に置き優しく背中を撫でた。

今の自分の状態は知らないが、鳴き声からしておそらく猫だろう。

「お前どこから来たんだ？」

「にいにゃにゃ（ここどこ？俺は、何で猫になってるんだ！？）」

困惑している燐だが、周りを良く見ると森の中で雪が積もっていたが、それより女性の周りを二体の鬼ゴブリンと雪だるまの悪魔が寛いでいる

現状に燐は、驚いた。

「にゃ、にゃー？（何でこいつらこんなに大人しいんだ？）」

燐が、驚くのも無理はない。

悪魔は、人に害なす存在だからだ：しかし彼らは、燐を少し警戒するも女性の側で寛ぐ姿を啞然と見ていた。

「ふふふ、可笑しな顔」

女性が、ふんわりと笑う姿は、しえみの様で燐は、顔を赤くしながら優しいぬくもりにうっとりするが、意外な訪問者のせいで長く続かなかった。

がさがさ…。

「やっぱりここにいたか：探したぞ。ユリ」

「にゃああ！？？にゃにゃ！？（ジジイ！！？それにユリって確か…）」

「何しに来たの獅郎」

「分かっているだろ：ヴァチカンに戻るぞ」

「嫌よ。私はら帰らない」

「ユリ！」

獅郎は、ユリを説得するが、彼女は、聴きたくないと言われ、燐と回りの低級悪魔たちと一緒に小屋の中に入ってしまった。

「ユリ！開けてくれ！ここから出るんだ。町の人はお前の事を“森の魔女”だとか“悪魔にみいられた女”だと言われてるんだぞ！？」

「どうして……どうして人と悪魔は……分かれ会えないの……悪魔だ人だと分けて考えるから可笑しいことになるんじゃないですか！」

「ユリ！」

「……っ！……この子たちは私の大切な友達です」

ユリの言葉に獅郎は、しばらく沈黙していた。

「……分かった。近い内にまた来るよ」

足音が、遠ざかる音にユリは、いつもの優しい顔では、なく寂しそうな顔で燐を抱えベッドに腰をおろした。

「青猫ちゃん……ビックリしたでしょ？御免なさい」

「にい。にい……にゃ！！（気にするなよ。か……母さん！！）」

燐は、まだ動けない体ながらもユリを励まそうとふくよかな頬をざらつく下で嘗めた。

「くすぐったいは！でも慰めてくれてありがとう」

やっと笑顔になった母の顔に燐は、満足そうな顔したが、また表情を暗くさせたユリに心配だと鳴いた。

「実はあなたに話したいことが、あるの…」

「にいい？（話したいこと）」

「私の体の中にサタンがいるの」

「にゃ！？にゃあああ！！？（さ！サタンだって！！？）」

ユリは、目を見開きながらにゃあにゃあと鳴く猫。燐の驚きが、伝わったのか、悲しそうな寂しそうなしかし…嬉しそうな顔で燐を見つめていた。

「でもね…彼は、寂しかったただけなの。傷つけたくないのに自分が、干渉した体が、壊れてしまうから…いつも1人ぼっちだったのよ？」

それからユリは、楽しそうにサタンの話をする姿に燐は、耳を疑った。

まあ最初の出会いがあれだからそれは、しかたないかもしれない。日が暮れるまでノロケを話続けるユリに燐は、いい加減お腹が、空いたと鳴く声に彼女は、我に帰ると恥ずかしそうに猫になった燐の頭を撫でた。

「御免なさい。あなたに話しても分からないのに…でも何でかな、あなたには、どうしても話さないとって思ったの」

苦笑いするユリに燐は、何も言えなかった。

もし彼女の話しが、本当なら燐は、サタンを殴ることに抵抗を感じたからだ。

※※※

ヴァチカン本部の最上階に位置する執務室の机に腰かけている獅郎とその奥の椅子に座っているユリの父。エルンスト・フレデリク・エギンが険しい顔で獅郎を見ていた。

「それでユリは連れ戻せたか？」

「…失敗しました」

獅郎の言葉にエルンストは、憎らしいと言わんばかりの表情でここにいないユリを思った。

「代々ヴァチカンに使えて来たエギン家の1人娘が、悪魔付きだと困るのだ」

「……………」

エルンストの言葉にも無言を貫く獅郎に苛立ちながらも再び命令をした。

「一刻も早くユリを連れ戻せ。方法は、何でもいい」

「……………分かりました」

※※※

獅郎は、ユリを連れ戻すため、あの森に足を踏み入れ威嚇する鬼たちに無言でライフルを構え打った。

燐と一緒に薪を拾い終え丁度山小屋に向かう途中に鬼たちを無言で打つ獅郎を見つけ驚きながらも止めようと腕に抱きついた。

「何やってるの！お願いだから止めて！！皆私の友達なのよ！！！」

「邪魔するな！」

「きゃあ！」

「にゃあ！（母さん！）」

獅郎が、乱暴に腕を振りほどきその衝撃で倒れてしまったユリに燐は、駆け寄った。

「お前は、悪魔にみいられているんだけなんだ！俺が、悪魔を全て倒す。それが、俺たち祓魔師の役目だよ！」

なおもライフルを構え打ってきた。

戸惑い悲鳴をあげる鬼たちの姿にユリは悲鳴染みた声を出した。

「お願いだから止めて…“止めろって言うてるだろうがあ！！”」

ユリの体にまわりつく青の炎に獅郎は、目を見開いた。

「お前…その炎は…サタンのか!？」

驚く獅郎を他所にまわりついていた火が、消えユリは、獅郎に悲しげな笑みを向けた。

「隠しても仕方ないからとりあえず私の小屋に来てくれる？」

ユリは、そう言うときと燐と獅郎を連れ小屋に入って行く姿に鬼たちは、不安げな声をあげるのにユリは、にこりと笑った。

「直ぐ終わるからお利口さんたちは、待っていてくれるかな？」

ユリの言葉に不服そうに頷く鬼たちに笑いかけ今度こそ山小屋に入って、行った。それからユリは、包み隠さず全てを話した。いつからサタンと出会ったのか、自分のお腹の中にいる子供を産みたいなど獅郎は、無言でユリの話しを静かに聴いていた。

「……………」

「……………」

「……………(汗)」

二人から出る無言の圧力に燐は、冷や汗を流しながら二人を見守っていた。

無言の沈黙を破ったのは、意外にも獅郎の方だった。

「……………好きにしろ」

「……………」

出ようとした獅郎だったが、山小屋を出る途中に振り向かずポツリと言った。

「ヴァチカンからお前が、国外に逃亡したと言っというてやる。僅かだが、時間稼ぎになるだろう」

「獅郎…」

「ただしお前は、この森から出るな！」

「ありがとう獅郎…御免なさい」

涙を流しながら謝るユリに獅郎は、今度こそ出て行った。

「にい…（母さん）」

「青猫ちゃんは、こんな山小屋から出ないの？」

「にゃー！にゃー！（離れねえ！俺は、母さんという！）」

ユリには、燐が、何を言ってるか分からないが、何となく慰めている感じがして啼いたせいで赤くなった顔で燐に笑いかけた。

「ふふ、ありがとう青猫ちゃん」

「にいー（母さん…）」

自分を抱き締めながら体を震わすユリにどうか母さんが、幸せにな

ります様にと神を信じない燐は、願わずには、いられなかった。

——しかしそんな燐の願い虚しく願いは、叶えられなかった。

とうとう獅郎の嘘が、ばれ彼が、ユリに手を出したと言う身の覚えもめない重罪をかけられ牢屋に幽閉された。

「残念だよ獅郎くん。君ともあろう者が、エルンスト卿のお嬢さんに手をだすなんて」

「俺は、何もやってない！ユリは、悪魔にみいられているんだ！！しかもただの悪魔じゃない、“魔神サタン”だ！！！」

しかしそんな獅郎の訴えも虚しく二人の監視官に信じてもらえなかった。

無理もない：あの森を出入りしていたのは、獅郎だけだったからだ。去って行く監視官に獅郎は、なおも訴えた。

「待ってくれ！事態は、一刻も争うんだ。だからユリを！」

獅郎の訴えは、扉により閉ざされてしまった。

検査の結果。ユリのお腹の中に悪魔の子供が、いると分かりスウキイ卿は、医者になにかならないかと言ったが、医者は、ヴァチカンに反すると否定。けして曲げないユリの強い意識にエルンスト卿は、実の娘に忌々しそうに魔女めと罵った。ユリ・エギンは、法廷尋問にかけられてしまった。

燐も何とかして母を助けようとしたが、所詮猫の姿の自分では、戦

略にならずユリと一緒に法廷に連れて来てしまった。

「被告ユリ・エギン。あなたのお腹の中に悪魔の子を宿していると言う申し立てが、あったが、本当が？」

「はい、間違いありません」

ユリの言葉に法廷に集まっていた人々は、同様していた。しかしユリは、そんな声に臆することなく淡々と言葉を積むいだ。

「悪魔は、時として人を脅かしたり怪我也させます…しかしそれは、知的好奇心が、旺盛なだけなんです。私たちは、互いに学ぶことも愛し逢うこともできるはずですよ！」

ユリの言葉に法廷のざわめきは、更に広がった。

「悪魔に愛情何かあるか！」

「魔女め！」

「火燵りにしろ！！」

「判決を言い渡す！詩文、ユリ・エギンを死罪とする」

「にゃあ！！（てめえ母さんに手を出すな！！）」

「こら、暴れるな…仕方ない」

ばちい。

「にゃあ!？」

「猫ちゃん!! その子は悪魔と関係ないは! お願いだから離してちょうだい!!」

暴れていた燐だが、何かの術をくらい気を失ってしまった。

その姿にユリは、燐の元に向かおうとしたが、控えていた祓魔師たちを押さえつけられた。

「その青い猫は、サタンの関係者かもしれない…被告人と一緒に連れて行け!」

「はあ!」

「離してちょうだい! あの子は悪魔じゃないは、普通の生き物よ! ? 罪なら私が、被りますからその子に手を出さないで!!」

しかし誰もユリの話しに耳を傾けるはずもなく二人は、ヴァチカン中央に張り付けにされた。

その頃獅郎は、ユリの処刑の知らせにうなだれていた時に方面者が、現れた。

「お久しぶりです。藤本さん」

「メフィスト!」

獅郎の元に訪れたのは、白い祓魔服を着たメフィスト・フェレスだった。

「何があった！ユリは…」

「サタンの襲撃です」

「……っ」

「彼は、自分の妻と子を奪い返しに来たんです」

メフィストの言葉に何も言わない獅郎は、牢屋から出ると黙ってついて行った。

「既にサタンの器になりうる世界各地の祓魔師たちが、犠牲になりました。ヴァチカンで動ける祓魔師は、もはや貴方だけです」

がらがら…。

二人は、何かを引く音に目を向けると全身血が、滲む包帯に巻かれた瀕死のフレデリが搬送されていた。

「フレデリ卿？」

獅郎の言葉にフレデリは、ぐぐもった声で命令した。

「ユリ・エギンは名前を変えて逃走した…ユリを殺せ！腹の中の子もろとも始末するのだ…！」

※※※

二人は、森奥深くの山を走っていた。

獅郎の背中に袋で包まれた劍が、あった。

獅郎は、走りながらあの時にメフィストに言われた言葉を思い出していた。

※※※

「これは…」

「降魔劍と言いまして不浄王を倒した劍です…これならサタンの子供を殺せるかもしれません」

「降魔劍……」

※※※

二人が、たどり着いた先は洞窟だった。

その前に雪達磨スノーマンの見張りを祓った二人は、その前で赤く大きな花に横たわっているユリ・エギンを見つけた。

「ほら見て…炎の子は隣で白いのが、雪男よ…」

ユリは、腕にいる二人の赤ん坊に笑いかけていたが、妊娠している中で長期の脱走に精神的な疲れもありメフィストの目にユリの死の匂いが、した。

「きつとこの子たちが、人間と悪魔が、共存する世界を作ってくれ……」

ユリは、最後まで言い終わる前に静かに息を引き取った。

「……………」

「どうします？ 命令では、母親と赤ん坊を殺せと言う命令ですが、母親の方は死にましたので後は、赤ん坊だけです」

メフィストの言葉に獅郎は、降魔剣を抜こうとしたが、目を見開いて驚く獅郎にメフィストは、いぶかしげに見た。

「藤本？」

「こいつ……笑っていやがる」

獅郎の言う通り青の炎を纏った赤ん坊は、意識が、ないはずなのに確かに獅郎に無垢の笑顔を向けている様にふと、ユリが、あの時言った、言葉を思い出した。

「“悪魔だ人と分けて考えるから可笑しなことになるんじゃないですか！”」

「…なあ、メフィスト」

「何です？」

「この双子は、俺が育てる」

獅郎の言葉にメフィストは、ぽかんとしていたが、突如笑いだした。

「グハハハハ！冷徹で冷酷と恐れられた貴方が、サタンの子供を育てる？ブハハハハ！！」

しばらくして笑いの発作が、収まったメフィストは、獅郎にある約束を取り付けた。

「分かりました。それでは、その赤ん坊が、悪魔として覚醒したら私にその命を頂きますけどよろしいですか？」

「…構わねえ」

「そうですか…では、ヴァチカンには、双子を始末したと報告しましょう。それとこれは、オマケです」

メフィストが、指を鳴らすと青を纏っていた赤ん坊の炎が、降魔剣に流れる様に獅郎は、驚きメフィスト見る獅郎に肩をすくませた。

「ふう、最初から炎が、灯っていたら勝負にならないでしょ？」

「…ありがとうメフィスト。恩にきる」

※※※

そこで燐は、ふっと意識が、戻り今自分が、ふかふかのベッドにいることに驚きながらも目尻に流れる涙を拭いもせず呆然と天井を見た。

「……………夢？」

しかし夢にしては、妙にリアルな感触に燐は、今だ学園の制服を着る体を抱き締めた。

「……………母さん」

燐は、ユリと共に張り付けにされ今まさに処刑が、行われる直前周りにいた祓魔師たちが、青の炎に焼かれ倒れる様を啞然と見ていたが、ユリと自分の縄を切る相手にユリは、目を見開いた。

「サタン！貴方なのね！！？」

ユリは、サタンに取りつかれ身体中火傷をおい顔が、炭になってしまっている父親の心配よりもサタンの身を心配している姿に燐は、複雑な顔で母を見た。

「“逃げろユリ……………こいつの体も長く持たない”」

「ああ……………いやああああ——……………！！！！」

回りが、青の海に囲まれている中燐は、悲痛な悲鳴をあげる母に何もできない自分に苛立ちながらも見守るしかなかった。

その後は、ユリと一緒に逃げる途中力尽きて死んだ俺は、人の姿になりユリを…母さんをずっと見守っていた。
例え何もできず見守るしかできなくても。

「父さん…俺は、何を信じればいいんだよ………」

燐の呟きに答えてくれる人は、誰も居なかった。

三話 喧嘩の後は仲直り？（前書き）

やっと書けました！長い間書いてなかったので間違いだらけですが、暖かい目で見守ってください。ちなみにアマイモンは、精神年齢高いです。メフィスト組より大人です。

三話 喧嘩の後は仲直り？

寝起きと夢の酔いでボーとしていた燐だがやけに騒がし外に眉を寄せるていたが、燐が寝てるベッドの隣でポテトチップスを手掴みでボロボロ床に溢している異なる緑色のグラデーシヨンの髪にどうセツトしたか不明だが、天辺が尖っており可愛いらしい顔立ちだが目元の隈と硝子玉の様な黄緑色の瞳が全てを壊していた。

「なあ何で俺はここにいるんだ？後、お前誰？」

「（ボリボリ、ごくん）…お前ではありません。アマイモンです」

「あ、あまいもの？」

「はあ、アマイモンです。君の兄の様な者ですかね」

「は？え？だって俺の兄弟は雪男だけだろ？？」

今だに混乱する燐にアマイモンは無感動に燐を見つめていた。

「その話しは後でします。ですがその前に僕を助けてください」

「はあ？」

「ある空間で大規模の殺し合いが、行われています。君を賭けての戦いは面白そうなのですが、参加したら恐らく僕は瞬殺ですので変わりに君が出てください」

自分の兄と名乗るアマイモンのとんでもない言葉とここまでの経歴

だとか一気に頭に押し寄せ燐の残念なオムツの様な頭が、オーバーヒートを起こしてまたベッドに倒れる燐にアマイモンは首を傾げながら立ち上がり真上から覗いた。

「顔が赤いまんま目を回してますね……そういえばヘビモス連れて来るの忘れたな」

アマイモンはさて、どうしようかと考えていたが、考えるのも面倒くさくなりとりあえず燐を今だに殺し合いをしている危険地区に連れて行くことにし米俵の様に担ぐと兄から貰った無限の鍵を使い戦場に向かった。

※※※

祓魔熟にいた二人だが、場所を変え今は広く何もない空間でメフィストとファングが、戦っていた。

「素晴らしい“魔法”ですね。貴方の魔法が、私にきかないとは」

「お前こそただの悪魔ではないな？」

ファングはさっきから目の前の悪魔に違和感を抱いていた。

本来魔法を使うには自然から生まれた妖精の力が、必要だ……しかしこの男から精霊を使役してる分けでもましてや神聖魔法でもないからだ。

「貴方の魔法はまるでゲームキャラが、使う技に酷似してますね……しかしこの私を短時間ながらも苦戦するとは、このメフィスト・フ

エレスも驚きです！」

「貴様はいちいちリアクションがオーバーだな、まるで道化師だ」

「道化師で結構！さて、こんな茶番もそろそろ終わらせましょうか」

不敵に笑うメフィストにフアングは、早く燐に合うためにここで蹴りをつけるべく精霊がいないが、自身の特性を生かし最強の火精霊魔法を二人で唱えた。

「赤き光より来られし炎の精霊よ！」

「アイン」

「見に纏いし紅獄の炎で焼き払いたまえ！」

「ツウ、アイン」

「爆紅百花！」

「ドラ！」

二人が、最後まで呪文を言い終わる前に自分たちに向かってきた毒のブレスをメフィストは結界で、フアングは風霊魔法で弾き返した。

「何の真似だ…アマイモン」

殺気たつメフィストの視線にフアングは、目を向けると口にロリポップを加えた緑のトンガリが特徴的なアマイモンが最近ペットにしたストーンワームの頭を撫でていた。

「よしよし。良く怖い兄上たちの元まで来ましたね」

「しゅる、しゅるる（あ、アマイモン様〜）」

ストーンワームは、アマイモンの労りに感動しまるで犬の様に尻尾をふる姿に二人は何だか殺し合いをするねが、馬鹿らしくなっていた。

例えアマイモンが無表情な顔でストーンワームの頭を撫で過ぎて鱗が抜けても。

「ところでアマイモン。貴様は本当に何しに来たのですか？」

「ああ、忘れるところでした…うんしょ」

ストーンワームの頭を撫でていたアマイモンは、メフィストの言葉にここに来た理由を思いだし後ろにいた誰かを横抱きにしストーンワームの背中から降りた。

「燐！」

「奥村くん！？」

「奥村燐。あの馬鹿たちに言うのです」

驚く二人を無視しアマイモンは燐に促すと燐は二人をきつと睨んだ。

「お前ら！こんな無意味な殺し合いをするな。俺は、喧嘩する二人何か嫌いだあ！！」

「（ガーン！？）」

燐の“嫌い”発言に二人は石になりアマイモンはメフィストのレアな姿に緑の携帯を出すと写メーをしていた。

「兄上のレア写真頂きます」

「……」

「アマイモン…貴様！」

固まっていたメフィストだったが、愚弟のアマイモンに己の失態を見られだけでなく写真に納められたことに気づきい殺さんばかりに睨むが、慣れているアマイモンはロリポップを口にくわえたまま二人を眺めていた。

「落ち着いてください兄上。そんなに睨むと奥村燐に嫌われますよ？」

アマイモンの言葉にメフィストはアマイモンの腕の中で震えている燐に困惑気味の顔で見ていた。

「あ、あの燐くん？」

「……（がたがた）メフィスト怖い」

「！-」

燐の言葉にゆっくりと膝をつくメフィストにファングは目を細め鼻で笑うとゆっくりと燐の方に向かうが、燐の一言に固まってしまっ

た。

「てかあんた誰？」

「!?!?」

「…案外兄上たちは馬鹿ですね。片方がオタクで片方は石頭、奥村
燐が嫌う組み合わせですね」

「「!?!?!?」」

自分たちより弱くしかも出番が、圧倒的に少ないワキキャラの言葉
に二人は口から血を出し倒れる様をアマイモンは呆れた顔でそんな
二人を眺めていた。

「…ヘタレ」

「あ、アマイモン？一体どうなったんだ？」

「君は知らなくて良いですよ」

「?」

?を飛ばす燐にアマイモンは無言でストンワームに乗るとそのま
ま二人の存在を無かったことにしてそのまま元の世界に帰ってしま
った。

「帰ったら兄上のために名誉挽回のためにホローしなきゃ僕。殺さ
れますね」

アマイモンは滅多にしないため息を洩らした。

四話 四天王

フアングと離れどこかの森に降り立った四人はまず状態確認から始めた。

「うお！森なんて久々だな♪」

「何をはしゃいでるエドラス！我らはフアング様と離れたただけなく見知らぬ世界に来ているのだぞ！」

「そんなに怒るなよマゲラン。ねえ、エウレカ♪」

「あなたと話すことなんてないは」

能天気なエドラスに二人の竜は突っ込むが、後ろにいたアルフレツトはそんな三人を無視し森の奥へと行ってしまった。

※※※

一人で森あるいていたアルフレツトは、頬を膨らませていた。

「うー、フアングはどこにいるの？」

四天王と言ってもまだまだ子供。

本来なら親の庇護かにいなければいけないが、生まれた時に体が弱い個体だったためそれを恥じた母親に捨てられたのだ。

アルフレツトの家系は、初代竜王の親友のアルフィードの血統にあたるからだ。

もしファングが、通らなかつたら今の自分はいないだろ。

「……ぐすう…」

やはり一人で森を歩くのに限界だった。

一度引き返そうと思ったが、道は暗くて分からないため無理だったら当たり一面森と暗闇しかない空間に『翼をだす』と言う選択肢は頭になかった。

「ひつく…ふえ、ファング……僕を一人に、ひつく、しな…いでよ……」

耐えきれず涙を流すアルフレットに誰かが、近づい気配がして気配のした方を見るとおかつぱ頭をした少女が、駆け寄って来た。

「うわぁ！ビックリした。大丈夫ですか？」

「……大丈夫だよ」

「大変あなた怪我してるじゃないの！」

慌てる少女にアルフレットは腕の傷に視線をやって納得した。

「こんなのかすり傷だ」

「それでも駄目！とりあえず傷の手当てをしたいから私と来てくれますか？」

「いやだから…」

「駄目！治療を受けてください！！」

「……はい」

一見優しそうな少女の必死な態度に負けたアルフレットは少女に着いていくことにした。

「怒鳴ってごめんなさい。私、杜山しえみって言うの、よろしくね」

「……アルフレット」

「そうなんだ、よろしくね！でも、何で私の名前を言ってくれないの？」

「僕の見たところ君は魔力がないだけでなく真名まなすらない。そんな君に名前を言ってしまったら肉体だけでなく魂すら縛ってしまうからね…変わりに“花の子”って呼んでも構わない？」

「うーん、ちょっと微妙だけど構わないよ！それじゃ私あなたのことアルフって言うね？」

「……！」

恥ずかしそうに笑う少女が、あまりにも可愛いくって思わず視線を反らしてしまった。

「うん？」

「どうしたの？」

色々と二人で話しながら森を歩いていたアフレットだったが、いきなり立ち止また彼にしえみは首を傾げた。

「何か忘れている様な……まあいつか」

「変なアルフ」

こうして二人は無事森を抜けられたが、残っている三人は……。

「だから…あれ？」

「どうしたエドラス？」

今まで会話から喧嘩に発端した三人だったが、エドラスの声に二人は一時喧嘩を止めリーダー格のマゲランが、聞いて来た。

「チビ……元よりアルフレットは？」

「「……………あ」」

三人が、やっと森を抜けアルフレットと再開出来たのは朝日が、昇る頃だった。

五話 優しい奴程怒らすな（前書き）

久しぶりの小説が、シリアスかギャグか、全く分からない文書になって申し訳ありません！

文書も無駄に長いです。

もしかしたらひどく読みにくい箇所もあると思いますが、そこら辺は許してください！

五話 優しい奴程怒らすな

一時理事長室に來た四人は何故か中で待ち構えていた燐の双子の弟、奥村雪男が、いた。

「それでフェレス卿。詳しく説明をしてもらいますね？」

「ゆ、雪男？ お前何かお前怖いぞ？ そ、それに俺は関係ないだろ！
！」

びくびく震える燐に雪男は光が眼鏡で反射し表情を窺うことは出来ないが、人差し指で眼鏡をくいっ、と上げた。

「兄さんは黙ってて。僕は今フェレス卿と話してるんだよ？」

「……………すみませんでした」

雪男の背後から何かしら出ている圧力に負け、さらに縮みこまってしまった燐を隣で一緒に正座をしていたアマイモンはそんな燐の頭を爪で傷つけない様に撫でる姿に雪男のオーラが強まっていく姿にファングは手を挙げた。

「ブラコン。貴様と燐が、兄弟とは本当か？」

「誰が、ブラコンですか！ そうですが…それが、何か？」

「お兄さん。奥村燐を下さい」

ぴしいん！

ファングの空気を読まない爆弾発言にその場が氷ついただけでなく三人の発するどす黒オーラのせいで心なしか部屋の記憶は一気に氷点下まで下がった。

「……て…いに…」

「？」

「誰がお兄さんだごらあ！てめえの様なコスプレ野郎何かに兄さんをやる位なら僕のお嫁さんにするわあ！！」

「お待ちなさい眼鏡。燐くんは、私と前世で結構を誓いあった中ですよ？」

「誰にも兄さんをやるものかあ！全員血祭りじゃあああ——」
「……………！！」

がっしやあああん！

早々収集が、つかなくかり理事長室にて雪男を加えた第二ラウドに突入する馬鹿たちに一般常識を持つアマイモンは、説明する気もなかったが、面倒事も嫌いなため燐をお姫様だっこすると慌てることなく窓際から飛び降りた。

「ぎゃあああああ落ちるうううう——……………！！」

「うるさいですよ。それ以上騒ぐと落とします」

「ひい!？」

悲鳴を上げ耳元で騒ぐ燐を黙らすと三人に気づかれない様に行動していたが、今アマイモンたちがいるのは兄であるメフィストが、張った結果の中だ。

それに気づかないはずもなく……。

「アマイモン! 貴様燐くんを連れてどこに行くのですか!！」

「あれが、お前の弟か? 頭と隈意外似てないな」

「ぜえぜえぜえ…あのブロッコリがあ! てめえらを血祭りに挙げるのは後にしてやる。感謝しろよなあ!？」

キャラが、変わってしまったっている雪男だが、彼らにとってそんなのはどうでもいいのだ。

問題はアマイモンから燐を取り戻す! ただそれだけだ。

※※※

アマイメンは燐を抱えながらこれからどうしようかと考えていた。

「うーん、早く逃げないと今度こそ兄上に殺されますね」

「お前確かアマイモンって言ったよな」

「はい、そうですが？」

燐はさっきからアマイモンが、兄上と言う単語に疑問を持っていたのであまり相手のプライベートを聞かない様にしようとしたが、興味が勝っていた。

「さっきからお前兄上って言ってるだろ？雪男はあり得ないとして、残りの二人のどれかと思うんだけど…やっぱりあのコスプレ野郎か！」

「……。あの白銀ですか？違いますよ、僕の兄上は兄上です」

「て、言うとなメフィストか？でもあいつは祓魔…「そうですよ」はあ？？」

燐の言葉を遮ったアマイモンは草影に隠れ一時しのぎの結果を張ると燐にとって驚愕の真実を教えた。

「今燐が、言ったその人が、僕の兄上です」

「……………まじ？」

「まじです。あの白銀は良く分かりませんが、自分のことを神と言っていました」

「……………へえ」

驚き過ぎてもはやリアクションを起こす気も起きない燐を残念に思
いながら怒れる兄上たちをどうやって慰め様かと考えている時、背
後の殺気に気づいたアマイモンは燐を突飛ばすと同時に重い一撃に
気を失ってしまった。

「アマイモン!!」

アマイモンに突飛ばされ一言文句を言おうかと振り向くが、血を流
しピクリとも動かないアマイモンの姿に燐は血の気の引く音を聞き
慌てて抱き起こした。

「アマイモン!おい、しっかりしろ!!」

「無駄だよ兄さん」

「雪男!? どうしてお前が…」

驚く燐に雪男をニコリと笑った。

「兄さんに手を出したから攻撃したんだ。それより大丈夫兄さん?
怪我はない??」

「俺のことより早くアマイモンを…」

しかし燐は最後まで言葉を言えなかった。
アマイモンを身を下す雪男の顔に一切の感情が、なかったからだ。

「ゆ、ゆき…」

「兄さん…僕は兄さんを守るためなら何だってやるよ?それにそい

つは王候補の一角を担う地の王アマイモンだ。そんな危ない奴と兄さんが、一緒にいると聞いて心配したんだよ？」

「だからって…だからって攻撃することはないだろ！こいつは俺を守ってくれたんだぞ！！」

「兄さんに触れていいのも僕だけ…そして兄さんを守るのも僕だけだ！」

燐は今まで見たことのない弟の態度と意外な言葉に啞然としているとやっと意識が、少しだけ戻ったアマイモンは途切れ途切れながら言葉を積むいだ。

「随分…と、けほ！…っ、ゆが、だ…あ…っです…はあはあ、いいえ…それは…ごほごほ！！」

「アマイモン無理するな！」

本来悪魔ならとくに傷が塞がっているはずが、未だに血を流し続ける背中が抉れそこからむき出しの肉や背骨に燐は状態の深刻さや吐き気が、込みあげて口を手で塞ぐが、耐えきれずその場で嘔吐してしまった。

「おえ！…っ、ごほげほ！…おえ！！」

「大丈夫兄さん！しっかりして！！」

蹲る燐に雪男は駆け寄るが、燐はそんな雪男を倶利伽羅の鞘で凧ぎ払い二人から距離をとった雪男は燐を見た。

「どうして兄さん…何で悪魔なんて構うの！」

「雪男…悪魔が、全て悪い分けじゃねえ。確かに人に害なす悪魔は居るが、ただ知的好奇心が旺盛なだけで悪魔と言う理由だけで殺すのは良くねえ！俺たちの様に話し合えば分かり合えるはずだ！！」

「……………」

雪男は何も話さずただ兄の言葉を黙って聞いていた。

燐も雪男と…唯一の兄弟と戦いたくないが、それでもアマイモンに銃を向けるつもりなら戦うことも決まっている。

かつて母が、望んだ“皆が、悪魔人間関係なく笑顔で分かり合える世界”を叶えるために。

それが例え母が、望んで無くても己が、生まれた事で死んでしまったその償いだと。

「はい、そこまでです！」

「眼鏡。燐に傷一つ付けて見ろ、殺すぞ」

緊迫した空間を破ったのは煙と共に現れたメフィストとファングの姿に二人はポカンと間抜けな顔で現れた二人をまじまじと見た。

まずメフィストとファングの格好は以前見せて貰った漫画のキャラの服を着ていた。

確か人形が、人間と契約を交わしその人間同士できゅ…きゅうり？を争うアニキャラの服だったからだ。

「……お前何やってるんだ？」

「フェレス卿、あなたを変人だと思ってましたが、等々頭を虚無界

に飛ばしましたか？」

「失礼ですね。何も好きこのんで着ませんよ、燐ならともかく」

「俺は着たくなかったんだが、ファウストが言うにこの服を着れば燐の心を捉えられると聞いてな」

「どうです燐。似合いますか？」

「「……………」」

二人は暫し無言になってしまった。

無理もない、あんなにシリアスにしておいてこの展開だ、あまりにのギャップにもはや二人は先ほどの自分たちを馬鹿らしく思い同じタイミングにため息をついた。

「てか、メフィスト。何時もの服になってくれ、正直大の野郎が、紅のドレスに黒のゴズロリとかまじであり得ないし、後、お前ら雪男と一緒に当分俺の前に姿見せないでくれ」

「酷いよ兄さん！幼い頃は“お前を（一生恋人として）守るからな！”て言ってくれたのにあれは嘘なの！！」

「いつの話だよ。捏造するな、てか、○の言葉は俺言った覚えすらないぞ」

「私だってあの雨の日に“サタンをぶん殴ってお前の嫁になる！”て誓ったじゃありませんか！？」

「捏造しすぎ！前半はともかく後半は完全にお前の脳内イメージじゃねえか！！？」

「俺だって夢の中で“一生側に居てね？”と言ってたぞ？」

「うん、あまりにも突っ込む所が、多くて何処から突っ込めばいいのか分からないや」

三人の残念な思考回路にさっきとは違うため息をついた。

こいつら顔だけはいいのにもったいない、神は平等だとジジイは言ったが、俺は目の前の理不尽な現実を目を反らすといたたと言いなから立ち上がるアマイモンに気づき慌てて駆け寄った。

「アマイモン傷は！」

「…っ、心配いりません、ほら」

アマイモンは隣に後ろを向くと慌てて目を閉じたが、触ってくださいと言うアマイモンの言葉に隣は、恐る恐る目を開けゆっくりと背中手に手を這わせた。

「……っ」

「うわぁー、お前の肌って案外気持ちいいんだな」

背中に手を這わせた隣は、しつとりと手に吸い付く肌触りにうっとりとして誤ってアマイモンの胸に指が、掠めた。

「あん！」

「!?!? わ、わりい! け、け、け、怪我が、治って良かったな!」
アマイモンの普段ではけしてあり得ない小さいながらも甘い声に燐は顔わ真っ赤にするが、それを許さない三人の男たちが、居た。

ばさ、ばさ!

「兄さん! そんな悪魔の肌じゃなくて僕の肌触って! ほら!」

「馬鹿も休み休み言いなさい。あなたの荒れた肌よりも毎日手入れを欠かさない私の肌の方が、良いに決まっています!」

「……………」

「ひい!」

確かに二人の細身ながら無駄な肉が、ない端正とれた体は同じ男の自分でも見惚れが、美形を一瞬で台無しにする二人の血走った目や荒い息さえ見なければの話だ。

「さあ燐! アマイモンではなく私の美肌を触りなさい!」

「兄さん! 僕の肌をいくら触っても良いけど今度は兄さんの肌に触れたいな♪」

「ぎゃああああ——来るなあああああ!」

燐は半裸な野郎二人が、鼻息荒く自分に近づいて来る姿は燐じゃな

くても思わず逃げ出したくなるオーラを放っていたからだ。

悲鳴を上げ逃げる燐を追う二人を暫く眺めていたフアングだったが、流石にそろそろ助けなくて燐が、怒るだろと思い三人の去って行った後を追った。

一人残されたアマイモンは兄たちの行動に理解出来ないと言う顔になるとそろそろ虚無界に戻ろうと思いい己の血を使い小さな虚無門を作ると不気味な門に臆することなく体を沈めた。

「そう言えば今まで誰かに体を触られても感じなかったのに何故奥村燐に感じたでしょうか？」

アマイモンはあの時感じた不可解な“何か”を不思議に思うが、嫌な気もしないしそれどころか最つも奥村燐に触れたい、触れて貰いたいというこの不可解な“何か”が、“恋”だと気づくのはもう少し先の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0573w/>

異世界の訪問者

2011年11月4日14時15分発行